立教大学　「立教セカンドステージ大学」　Newsletter

RIKKYO SECOND STAGE

Contents

P1　セカンドステージのための「人文学的教養」
P2　入学式　P2～3　本科生の横顔
P4～5　本科ゼミナール紹介
P6～7　専攻科・社会貢献サポートセンター・フィールドスタディ
P8　本科生の声・新設の施設紹介・六大学野球観戦記

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。

Vol.13
発　行：立教大学　「立教セカンドステージ大学」
編集責任：上田恵介　編集長：石倉　寛
発 行 日：2014年 9 月25日
〒171-8501　東京都豊島区西池袋 3-34-1

セカンドステージのための「人文学的教養」

立教大学名誉教授
高橋　輝暁

50歳以上のシニアのために、人文学的教養の修得を基礎とし、「学び直し」と「再チャレンジ」のサポートを目的とした新たな学びの場――これは立教セカンドステージ大学の「趣旨・目的」を記した一節です。その基礎となる「人文学的教養」とは何でしょうか？

「教養」という日本語は、20世紀初頭にドイツ語のBildung（ビルドゥング）にあてられた訳語です。「ビルドゥング」とは英語のbuilding（ビルディング）と語源を同じくすることからも分かるように、もともと「形づくること」という意味です。英語が物質的な「もの」、たとえば「建物」をつくることを言うのに対して、ドイツ語では人間の内面的「形成」、ひいては「人間形成」を意味するようになりました。「人文学的教養」というときの「人文」とはまさに「人間」という意味です。そして、学問はこの「人間形成」を促すひとつの活動です。学問することを通じてさまざまな知識を習得するとしても、そこで習得された知識が「教養」ではなく、学習の過程で自己を「形成」する活動そのものが「教養」です。「教」わり、自分の人間性を「養」うというのが、この訳語の趣意です。現代では「学びを通じて自己を形成する」と言えるでしょうか。

このドイツ語に由来する「教養」は、さらにその起源を求めれば、西洋中世の大学で神学、法学、医学という上位学科の基礎とされた「リベラル・アーツ」すなわち「自由学科」にさかのぼります。「全人教育」を建学の精神に掲げる立教大学も「リベラル・アーツ」の大学を標榜しています。これを「自己形成」と翻訳すれば、若者だけの問題ではありません。人間は生涯を通じて「自己形成」の過程にあるわけで、そこでは学校や大学での学問ばかりでなく、仕事であれ、遊びであれ、社会活動であれ、家庭生活であれ、人生のさまざまな経験が養分となります。そうだとすれば、立教セカンドステージ大学に学ぶシニア世代の学生は、すでに人生のファーストステージにおいて豊富な経験を積んでおり、「自己形成」すなわち「教養」の達人に違いありません。

その教養の達人であればこそ、セカンドステージに登壇したとき、これまでのさまざまな利害関係やそれにまつわるしがらみから自由になって、自己を、他者を、自然を、社会を、ひいては世界をまったく新しい視点から見ることができるのではないでしょうか。かつては、日々の命をつなぐための労働から解放された自由人にのみ可能だった知的活動が「自由の学科」、すなわち「リベラル・アーツ」でした。この知の営みによって、利害得失やそれによる人間関係はもちろん、さまざまな先入観や価値観から自由になって、自己を、そして自己を取り巻く世界をこれまでとは異なる視点から見ることが可能になるはずです。それは自由人の自由のための営みです。その中で新たな自己を発見し、新たな人間関係のネットワークを構築し、新たに社会とかかわってゆく――こうした道を切り開くのが立教セカンドステージ大学での学びだと思います。（立教セカンドステージ大学ゼミ担当教員）

入学式 —学びの情熱尽きることなく— 2014年度

満開の桜のなか立教セカンドステージ大学（ＲＳＳＣ）本科７期生96名、専攻科６期生50名の入学式が2014年４月２日（土）午前10時半より池袋キャンパスの立教学院諸聖徒礼拝堂（チャペル）で行われました。

昨年10月にイギリス・ロマン派様式のパイプオルガンが新設され、今年度初めて入学式に使用されました。

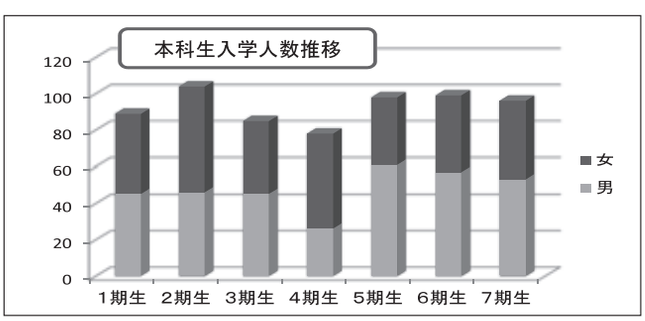
パイプオルガンの荘厳な演奏や聖歌・校歌の中で新入生一同、学びへの情熱を新たにしました。

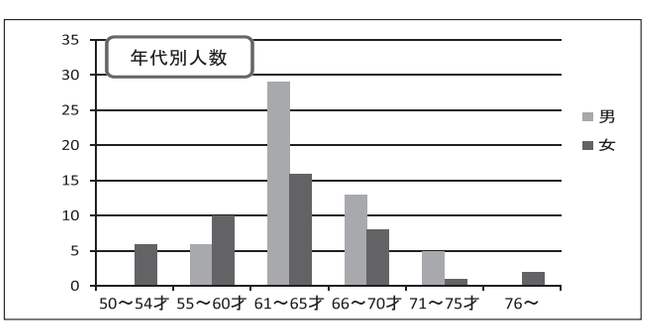
ＲＳＳＣはいわゆる「生涯○○講座」とは明らかに違います。修了論文やレポート試験もあり十分に受講生を悩ませています。ただ、何故か、全員が年齢を忘れ、生き生きと輝いています。

本科生の横顔 —アンケートは在籍者96名に配布し、回答は81名。有効回答率は84.4%—

2014年度立教セカンドステージ大学本科生（７期生）は96名。「学び直し」と「再チャレンジ」を目指して集まった同期生はどのような仲間なのでしょう。６月に実施したアンケート等をもとに７期生をご紹介します。

基本データ：在籍者96名。内訳は男性53名（56%）、女性43名（44%）。平均年齢は62歳、内訳は男性63歳、女性61歳です。年代別の人数はグラフを参照してください。





選択肢による回答

■居住地は首都圏に集中

東京38名、神奈川18名、埼玉15名、千葉４名、群馬３名、茨城･栃木各１名。回答があったのは前記の一都六県のみ。東京・神奈川・埼玉だけで71名（88%）になり、それ以外を居住地とする人が９名（11%）と過去２年に比べて少ないのが今年の特徴です。

■約４割の人が就業中

現在、仕事に就いている人は31名（38%）でした。

■通学状況は週４日以上通学が約７割

週４日が一番多く39名（48%）、ついで３日21名（26%）、５日以上19名（23%）、２日２名（２%）。約７割の人が週に４日以上通学しており、生活の中に占める立教セカンドステージ大学の割合が大きいと推測します。

■受講科目数は５科目以上が75%

ＲＳＳＣ開講選択科目数では６科目21名（26%）と５科目20名（25%）が回答者の半数を占めています。８科目以上10名（12%）７科目10名（12%）、４科目13名（16%）、３科目６名（７%）、２科目１名（１%）。

全学共通カリキュラム科目では１科目が29名（36%）、２科目が20名（25%）、無し26名（32%）、無回答が６名（７%）。回答者の約６割が全カリを受けています。

■ボランティア、地域での活動に関心が高い

活動経験有り62名（77%）、活動経験なし29名（23%）。活

動内容を複数回答可としたため、活動数は「のべ108件」。公開講座30件（28%）、ボランティア26件（25%）、自治会役員15件（14%）、管理組合役員11件（10%）、ＮＰＯ４件（４%）、ＰＴＡ２件（２%）。公開講座が一番多いのは、さすがＲＳＳＣ生、当然の結果と頷けます。

■入学動機は「生き方探し」が今年もトップ

複数回答可としたため、回答数は「のべ184件」。「これからの生き方探し」50件（27%）、「教養、生涯学習」48件（26%）がほぼ同数で多く、次いで「友人との出会い、ネットワーク作り」27件（15%）、「充電」20件（11%）、「専門分野の学習」17件（９%）、「規則正しい生活」「居場所を求めて」はともに11件（６%）に分散します。その他の欄には「論文を書きたい」「自分の無教養を補う」との記述がみられました。セカンドステージに向けて問題解決を模索するシニアの姿が彷彿としてきます。

自由記述による回答

■入学から現在までの学生生活について

良かったこと

・「大学の施設と設備の充実」。図書館、メディアセンター、ＩＴ関連・学食等が取り上げられ、特に図書館の素晴らしさに触れた意見が多くみられました。

・「人間関係・出会い」。上下関係、利害関係を抜きにした関係、豊かな経験、異なる価値観を持つ他者との出会いについて、喜びを異口同音に表現していました。

苦労していること

・「修了論文が重い」

・「学習・レポート・ＰＣ操作」

・「学生生活に体力・気力・記憶力が追い付かない」

■講義・ゼミの感想

・「講義・教授陣・学友」に対して「魅力的、個性あふれる、興味深い、楽しい」などの満足度が高い感想がある反面、「内容が簡単、期待外れ、双方向ではない、人数が多すぎる」との意見もありました。若い学生に対して態度の悪さ、私語、遅刻などへ苦言もありました。

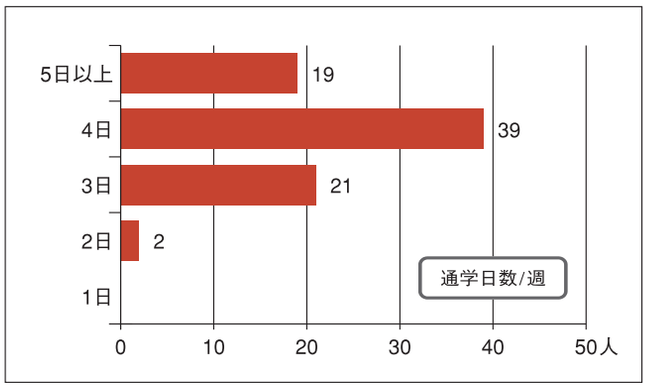
・「ゼミとサブゼミ」に対しては「楽しい」「意見交換が貴重」がありますが、「研究の場ではなく、社交の場として評価する」「運営に苦労している」「ゼミ、サブゼミの趣旨が不明」に代表される厳しい感想もありました。

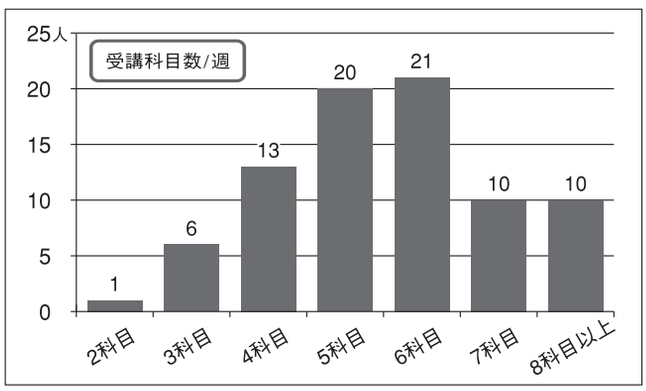
■若き日の学生時代との違い

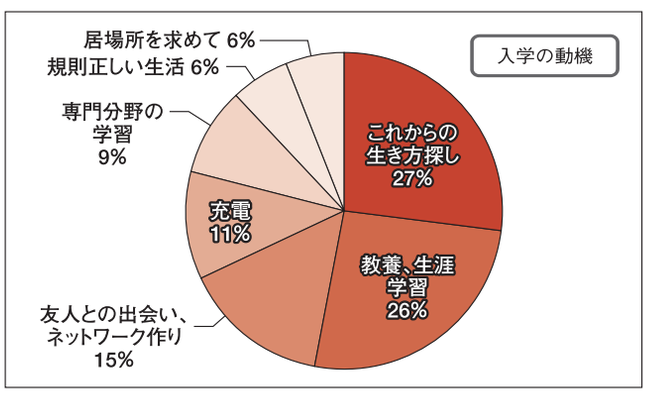
・「就職、成績に関係なく、余裕をもって楽しみながら学べる」「学生時代の不勉強、欠席を悔やみ、今は一生懸命、勉強」「自分で払った授業料の元を取ろうと思う」の意見に集約されるでしょう。

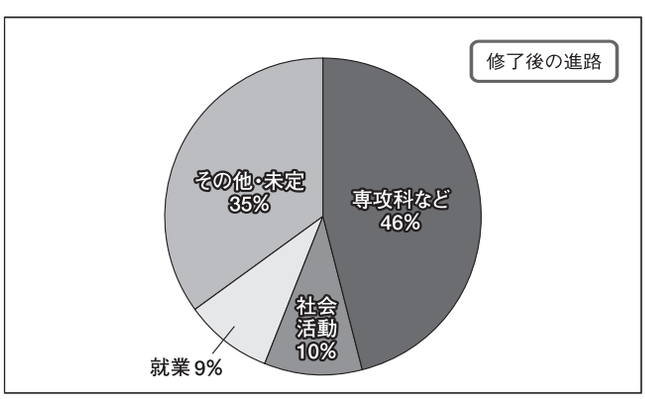
■修了後の進路は約半数がさらに進学

専攻科などへ進学37名（46%）、具体的記入は「大学院」「21世紀社会デザイン研究科」など。社会活動８名(10%)、具体的記入は「コミュニティを作る」「地域の活性化」「ボランティア」「在宅ヘルパー」など。就業７名（９%）。その他29名（35%）には「未定」が含まれます。









ＲＳＳＣのカリキュラムは、必修科目と選択科目のほか、全員が必ず参加するゼミに大きな特徴を持っています。本年度も８つのゼミが設けられ、個性あふれる担当教員のもと、それぞれ独自の方法で活発に運営され、主体的な学びの場を創造しています。

本科ゼミ

老川ゼミ

◇おしゃべりの中にも深い本質◇

今年度本科ゼミの中で最小派閥の老川ゼミです。近代経済史ご専門の経済学部教授老川慶喜先生とゼミ生８名との間で毎週真剣？な討議であっという間に90分が過ぎてしまいます。人数が少ないせいもあり、いたって和気藹々としており、話し始めると時間内では終わらず、都合のつく人はゼミ後、先生共々夜の反省会へ出かけていきます。たまたま介護福祉関係者が多かったので、その関係の討議も多く、常識でわかっているつもりでもプロと素人の認識の違いにお互いビックリ。また、他にも多種多様の経歴の持ち主ばかりのせいか、話があっちに飛んだりこっちに飛んだり、いったい何の話かわからないまま今日も反省会に突入というパターンです。修了論文についても、かなり進んでいるゼミもあるという噂さも省みず、マイペースで進めています。わずか数ヶ月前に知り合った人間がまるで百年の知己のようなゼミです。

安島ゼミ

◇自分のユートピアを目指す安島ゼミ◇

観光まちづくり方法論／ユートピアをご専門とする安島先生のゼミは女性６名、男性７名の計13名でどちらかと言えば女性陣に活発でアクティブな方が多く見受けられます。

また、皆さん多種多様な経験や生き方をされており明確な自分の意見や考えを持たれているためディスカッションになると議論が白熱してまとめるのに時間がかかり時にはまとまらないことさえあります。

そんなゼミ生の共通点は『新たな知識を得ることへの意欲と喜び』という価値観で一致していることだと思います。

授業が終わると雰囲気は一変、懇親会で大変盛り上がります。安島先生もちょうど我々と同年代のため話題や価値観に共通点が多く、まさに14人の同級生といった雰囲気。話題も多岐に亘り授業以外にも青春時代や身の周りのことなど云々。

ＲＳＳＣでこんな素敵な仲間と知り合えたこと、本当に感激です。

菊野ゼミ

◇たのしみがいっぱい◇

菊野ゼミは人事労務管理論、労働経済学や経営組織論をご専門とする菊野一雄先生を中心としたゼミです。メンバーは女性６名、男性７名の計13名です。菊野先生を筆頭にゼミ生は外見も若いが気持ちは、尚、若く好奇心旺盛です。菊野先生のモットーである「ゼミは心に火を付け合う一期一会の場である」のとおり、ゼミ生は互いに刺激し合い、切磋琢磨しています。ゼミのある日はアフター５ならぬアフター６で場所を変えて、お酒を潤滑油に議論、意見交換を行っています。先日、昼食ランチゼミの提案があり、実施したところ「新鮮で新たな発見があった」と好評でした。運営は本ゼミ、サブゼミとも話し合いで決められています。今後は、修了論文のことが中心になるようですが、浅草、鎌倉、高尾山、横浜への課外観察や芸術観賞、カラオケ等の企画が目白押しで楽しみです。

庄司ゼミ

◇―楽しく、仲良く、元気に学ぶ―◇

庄司ゼミは、男性８名、女性５名の合計13名からなり、出身地も遠くは岡山県から茨城、栃木、群馬、埼玉、神奈川、東京となっており、経歴も多種多様です。

「楽しく、仲良く、元気に学ぶ」をモットーに和気藹々と学んでおり、それぞれの修了論文のテーマもバラエティに富んでいます。

庄司先生には、ご専門の家族論などをご披瀝いただきながら冷静沈着、かつ深い洞察力のもとに私達を暖かくご指導いただいています。先生の大学及びセカンドステージ大学での豊富な経験からのご指導に対し、私達は安心して身を任せ、第二の青春を満喫しています。サブゼミでは、各人が得意分野や豊富な経歴などを披露し、楽しく興味ある語らいの場となっています。これからもいろいろな企画を通して、ゼミを盛り上げていきたいと思っており、夏休みには、軽井沢でのゼミ合宿が企画されています。これからも、先生や同窓生と充実した学生生活を送り、心のスクリーンにいろいろな思い出を刻みたいと思います。

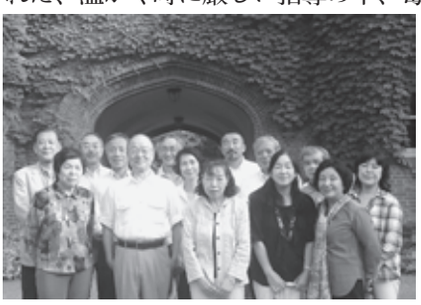
ナール紹介

ゼミの目的の大きな一つは、各自テーマを決めた修了論文を書きあげること。担当教員の指導とゼミ生同士の相互研鑽が週一回のゼミを舞台に展開されます。また、ゼミは真の仲間づくりの場でもあります。互いに理解し、友情を深め合う最大の場ともなっています。

鈴木ゼミ

◇能動的に学び・刺激しあい・高めあう◇

男性８名・女性６名、年齢も出身も経験も異なる総勢14名の「鈴木正男ゼミ」は一つのコミュニティー、「ゼミ＝修論作成の場」を中核に据え、鈴木先生の笑顔に包まれた、温かく時に厳しい指導の下、毎回刺激に満ちた時間を創造しています。



各自の問題意識の開陳からスタート、テーマの絞り込み展開へと現在進行中で、夏以降の本格展開への議論の盛り上がりが予感され、期待とプレッシャーが高まります。

春のサブゼミでは、「若者の政治離れ」をテーマに全員で議論、秋には、鈴木先生のもう一つの顔「立教大学原子炉管理室長」〈先生のご専門は「人類年代学」です〉の引率で立教大学原子炉見学を計画、自分で見・考え・行動する、社会問題へ取り組みも忘れません。

また、「共に研鑽！」の合言葉を放課後にも拡大、学外活動（別名懇親会）に領域を拡げ、六大学野球応援等へも積極参加、立教生＆第２の青春を満喫しています。

高橋ゼミ

◇学びも遊びも全力投球！◇

高橋ゼミは総勢14名（男性７名、女性７名）。高橋輝暁先生のご専門は近・現代ドイツの文学と思想、人文科学の歴史と理論、日独比較文化です。私たちが高橋先生と出会えたのも何かのご縁。せっかくのチャンスですので、カントについてご講義いただきました。深遠な学問の一端に触れ、大学で学んでいることを改めて自覚しました。修了論文も着々と進行しています。全員、テーマを発表し、高橋先生からそれぞれご指導とアドバイスをいただきました。その的確さ、視野の広さ、豊富な知識に皆、感服です。また、ご指導を通じて、現代社会の「多様性」についても気づかされました。

ゼミの後は場所を変えて、懇親会です。ご都合が合えば、高橋先生もご参加くださり、ドイツ留学時のエピソードなどをご披露くださいます。今後は大相撲観戦、バーベキューパーティ、六大学野球応援などを予定しています。「よく学び、よく遊べ」を実践している高橋ゼミです。

上田ゼミ

◇The intelligent travelers!!◇

美男？美女の本科生９名（男性６名・女性３名）からなるゼミの最若手は上田信先生です。先生は文学部教授でご専門は中国社会史ですが、アジア地域研究所長としても八面六臂の活躍をされています。春学期では「21世紀海域学の創成」を担当していただいています。

先生からは修了論文は各自のテーマで進め、自分しか書けないオリジナルな内容とすることが示されました。先ずは各自人生の「ターニングポイント」の発表を通して、物事の捉え方・内容の拡げ方のポイントのご指導をいただきました。その過程で、共有する時代背景を思い出して、仲間意識が芽生えました。現在は、各自の研究テーマ発表を軸にその内容を更に深めるべくお互いに意見交換をしています。そんなゼミが終わると、会場を変更しての延長戦です。

栗田ゼミ

◇学び合いの場を良き仲間作りの場に◇

栗田先生のご専門は、「文化人類学」。堪能なスワヒリ語を使って、人の移動と交流によりもたらされるタンザニアを中心とした東アフリカ地域の文化を研究されています。そのつながりから私たち11人のメンバーは、サブゼミで「文化人類学」とはいかなる学問かを学習会形式で学んでいます。発表者や進行役は持ち回りです。「文化」の成り立ちや文化人類学の研究方法を学ぶことは、学問へのアプローチの仕方を変えるだけでなく、私たちが立っている位置を客観的に見つめ直し、行動するきっかけとなる予感がします。これまでの生活環境・経験が違う11人が学び合いを通して、お互いを理解し、尊重し合うことは、ある意味小さな異文化交流と言ってよいかもしれません。人の交流により文化が変化していくように、私たち栗田ゼミのメンバーも、学び合いを通してよりよく変化していけたらと思います。

専攻科ゼミナール紹介

１年間の本科修了後は、本年度も50名が専攻科へ進学し、ＰＢＬ（Project Based Learning：一定のテーマに基づく問題解決型学習）による自主性、主体性の高いゼミ活動を行っています。

上田グループ　「五感で楽しむ研究」

専攻科生が主体で進めるグループワークは、自然・環境分野を分析しての研究テーマ選びから始まりました。社会経験が豊富な人の集まりのため、様々な考え方や意見が出され、当初予定していたスケジュールに比べると遅れている状況ですが、議論の中から相互の啓発が生まれて方向性が定まるという貴重な経験をしています。

研究報告書は、生活に密接した「食」の問題について纏める計画で活動中です。上田恵介先生のアドバイスを受けながら、資料による調査に止まらずフィールドワークによる体感や時には美味しいものを食べながら「食」について語り合う予定です。（K）

木下・鳥飼グループ　「超高齢社会の扉を開けば…」

私は今後の生き方を模索しつつＲＳＳＣに入学した。

専科ゼミ生15名のＰＢＬテーマ選定は“爆発するまでの議論”と“一人も取りこぼしなく、プロセスを楽しむ”を理念に激論の末、ついに夏季休暇に突入し爆発に至った。

その中で見えてきたものは、“シニアを社会のコストにしない”“シニアが活躍する成熟社会”への提言等、まさに私達の生き方そのものを問われる大きな研究テーマに取り組むことになった。

今後、フィールドワークを含め、同期と創造する超高齢社会の未来図は、それぞれが“輝き活躍する”ヒントが隠されていると確信している。（Ｉ）

千石グループ　「10人でマガジンを」

われわれのグループは文学者である千石先生の元に文学・思想に関心のある男性６人女性４人が集まりました。個人の関心事を最重要研究課題として自分を掘り起こす作業しながら意見を交換しています。その中から共通項目を見つけあう中で、研究の方向性を確認している段階です。そして専攻科の目標である「ＲＳＳＣ修了後の生き方」をメインテーマとしたマガジンを作りたいと考えています。夏休みを利用しての取材旅行や公演会、さらに秋にはゼミ旅行も計画しています。秋も深まった頃には千石グループはマガジンの完成の日を迎えていそうです。（M）

坪野谷グループ　「11人の挑戦者」

専攻科の私たちは今パーティ（ゼミ）を組んでＰＢＬという山を登っている。

何合目まで来たのだろうか、視界はまだあまり良くない。しかし先日ちょっと厳しい箇所をパーティ全員で通過した。それはひとえにアドバイザーの坪野谷先生と、昨年本科生の時に登った低い小山（サブゼミ研究発表）の経験のおかげだろう。途中で下山してしまった仲間やパーティを変えた仲間もいるが、私たちは全員でこの山のてっぺんを目指している。簡単ではないが力を合わせれば、そこにはきっと素晴らしい眺め「共生が豊かにする社会」が待っているに違いない。（O）

社会貢献活動サポートセンター

サポートセンターは在校生、修了生の混成で共通の志向の下にグループを組織し、社会交流と社会貢献活動等を通じて、セカンドライフの生きがい創造を目指して設置されたものです。第１期生から始まった活動は徐々にグループが増え、ＲＳＳＣ修了後もその研究活動が継続されています。

５月29日、本科生、専攻科生対象に「活動状況と今後の活動計画」と題して発表会が開催されました。各グループの研究発表はまさにこれからの私たちの生き方に大変刺激を与えるものでした。これらの活動への参画が、これからの生き方の学びと実践に大きく関わっていくのでは、と思います。

研究グループ名

アジアの貧困とNPO/NGO支援研究会	バングラディッシュをはじめとするアジア諸国の貧困の現状について研究し、対外活動や現地訪問を実施。NPO/NGOの活動にも参加。
かがやきライフ研究会	自らデザインして行く生き方を広く多くの人々に知ってもらい、多くの人々が“かがやけるライフ”を送るために情報発信する。
都市・癒し・自然交流研究会	都市生活者が積極的に自然との共生、農村漁村での生活を通して、心身共に元気になり、都会生活の質の豊かさの向上を目指し、各種情報発信。
ウクレレ合唱団『鈴懸』	「介護と看取り」の授業をうけてウクレレ合唱団を創設。初心者を集め。週２回勤労福祉会館にて練習。高齢者施設等をに訪問演奏会を定期的に実施
日本に住む外国人を考える会	日本に居住している外国人の歴史・生活・文化の実情を知り、共に生きていくために何が求められ、どのような行動が必要かを調査研究し実践。
生きがい創造研究会	「RSSCで出会った縁をつむぎ100歳までも好い時間を共有しよう」が活動趣旨。会員相互に生きがい、研究、社会参加等の発表をするほか、外部諸組織との研究交流も行う。質素に知的レベルを維持する。
アクティブシニア研究会	RSSC在籍時の「生きがい探し」の研究から修了を機に実践中心の研究会名とする。活動内容は、カルチャー系、レクリエーション系、ボランティア系の３分科会からなり、月１回以上の実践活動を推進中。
立教異世代交流倶楽部	受講生、修了性、学部学生の異世代が、自由に意見の交換を行い、相互に理解しあう場。月１～２回程度の交流会を実施。
コミュニティ活動研究会	豊島区の「としまNPO推進協議会」とのコラボレーションを図り、地域密着貢献活動、セミナー企画等の演習・実践を行う。
RSSCアクティブシニア活動倶楽部（仮登録）	次の３つのグループで研究活動を行う。①地域コミュニティー活動研究グループ、②プラチナ社会創造活動研究グループ、③オウンライフ活動研究グループ

フィールドスタディ

立教セカンドステージ大学の授業には、教室での座学だけではなく実際に現地に飛び出して実物に触れて学ぶフィールドスタディを組み込んだ授業が多くあります。そのうちのいくつかを紹介します。

☆功徳院すがも平和霊園見学会

小谷先生の「最後まで自分らしく―現代の葬送と墓―（一人称で「死」を考えてみませんか？）」は現在から、漠然と将来の「死」を想像するのではなく、フィルムを逆転させるように自分自身の「死」を考えさせられる授業です。さまざまな角度から死生観を論じ、自分と他人とのかかわりを感じます。

６月９日には授業の一環として、功徳院すがも平和霊園で「新しいお墓」の形態を見学し住職のお話を伺いました。この日はＮＨＫ“ＥＴＶ”の取材もあり関心の高さがうかがえました。自分の「死」を誰にどう託するのか切実な現実が目の前です。最後に、この授業は受講生に専科生の占める割合の高い授業です。(意味を考えてみてください)

☆上高地フィールドスタディ

上田恵介先生「生命の多様性」の授業の一環で2014年６月22・23日、上高地へフィールドスタディに行きました。植物学の第一人者の多田多恵子先生にもご参加頂き、先生２名、生徒15名というなんとも贅沢な課外授業でした。天候がかなり心配されましたが、なんと翌日は晴天という運のよさ。行き帰りのバス中でのＤＶＤ授業、１日目２日目のハイキングをしながらの動植物の観察、夕食後の講義、早朝のバードウオッチングと盛りだくさんの内容で、明神岳の景観や梓川の清流に心を奪われながら、前日に出没したというクマには遭遇せず、充実しきった２日間でした。

☆東証アローズ見学会

坪野谷先生の授業「暮らしに役立つ経済と金融」の一環として５月27日に東京証券取引所を見学しました。建物は近代的で、中に入るとテレビのニュース等でよく見かける光景がありました。それは、直径17ｍのガラスシリンダーで覆われたマーケットセンターでした。会社名と現在の株価がかなりのスピードで回っています。まさに経済が動いていることを実感しました。史料ホールでは、日本の証券市場のあゆみと東京証券取引所の歴史を中心に展示・解説していました。特に、昔の立会場では人がたくさんいてごった返しているのに対して、今は、マーケットセンターで数人の人が働いているだけでした。このように日本経済のメインステージを見学できたことは大変有意義でした。

☆日本銀行本店見学会

坪野谷先生の「暮らしに役立つ経済と金融」では、フィールドスタディとして日本銀行本店見学会を実施しました。５月13日当日はあいにくの雨降りでしたが定刻の９時30分には参加者40人が全員集合し見学が始まりました。

まず重要文化財に指定されている明治29年建設の旧館では旧営業を見学、アメリカ製の分厚い扉に守られた地下金庫、資料展示室などを見学しました。また、新館では現在の営業場を見学。私たちが日頃利用している金融機関とは全く異なる雰囲気に日本の金融を担う中枢機関だということを実感しました。最後に貨幣博物館を見学し日本の貨幣の歴史や貨幣政策の変遷を学びました。

参加者からは貴重な体験ができ金融政策に興味がわいたなどの感想が寄せられました。

☆小石川植物園の観察会

上田恵介先生の「生命の多様性」のフィールドスタディが４月26日・５月26日に小石川植物園で行なわれました。特に休園日に行なわれた観察会では、都心とは思えない静けさのなかでヒヨドリ、シジュウカラの美しくさえずる声に聞き入りました。普段であれば何気なく通り過ぎてしまう小さな草花や小さな昆虫の詳細な説明や草花と昆虫の関係とその進化、昆虫の特異な習性などについてたくさんの面白い講義を聞くことが出来ました。単に座学だけではなく、課外実習も重視されるとても楽しい授業です。

本科生の声

―ＲＳＳＣの尖兵たらん―

シニア世代の「学び直し」と「再チャレンジ」の学習プログラムをかかげ、当時急増する団塊世代の受け皿としてスタートしたＲＳＳＣも今年で７年目を迎え、その存在の真価を問われる時期になったと思います。今ここに７期生としてスタート地点に立てたことをとてもうれしく感じています。昭和46年４月、前年の過激な全共闘大学紛争後の高度経済成長最後の好景気の中で社会人となり、その後約43年間広い大海原や荒海を回遊し、遡上したサケに似た安堵感があります。さてサケは、次世代に立派な種を残していかなければなりません。高齢者人口は急激に増加し、医療・年金等社会保障費の増加や新たな課題も次々と発生してきています。今、まさに我々自身に突きつけられている問題です。世界で最初に高齢化社会を迎えた日本が、その手本を示し世界をリードしていく。「我々ＲＳＳＣはその尖兵たらん」とする気概を持つ。そこに存在の価値があると思います。

本科７期生　木村栄作

新世界はハイテンションの日々

親と恩師の決めたレールに従って音楽高校に進んで以来、特殊な狭い世界にいました。定年後は全く別な世界を体験しないと私の人生はあまりにも物足りない。この春ＲＳＳＣを選んで早期退職したことは、私の人生最良の決断でした。

昨秋からはボランティアのフィールドを広げるべく「パワーアップカレッジ練馬」(地域福祉を担う人材の育成)にも通っています。そちらで福祉に関しては充実したカリキュラムがありますので、音楽大学では縁のなかった「金融」「ジャーナリズム」に憧れて毎回聴き入っています。一般大学で学びたかった思いが実現するとは想像もしませんでした。

１年限りとなると何もかも興味をそそられ、講習会、講演会やオルガンコンサート等、参加せずにはいられません。縁あって同期となった方々とも一日一日を大切にしたい。いかに社会を、ものを知らなかったかを再確認する日々ですが、緑に覆われたキャンパスに足を踏み入れただけで幸せのスイッチがはいります。

本科７期生　岩澤延枝

新設の施設紹介

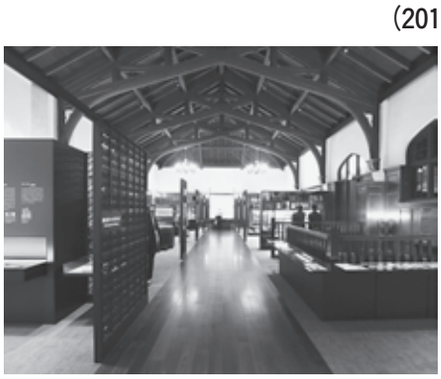
メーザー・ラーニング・コモンズ

(2014年４月14日)

学生が自由に利用できる総合学習スペース「メーザー・ラーニング・コモンズ」がオープンしました。様々なグループ学習スペースや個人学習に適したカウンター席も設置されています。

立教学院展示館

(2014年５月９日)



立教学院の歴史と伝統、教育と研究の取り組みを発信する場として立教学院展示館が開館し、一般にも公開されています。

ちょっと寄り道

春季東京六大学野球観戦記

瓢箪から駒のように話が決まり、ゼミの有志８人は五月晴れの土曜日、神宮球場に集まりました。

応援席はチアガールの爽やかな笑顔、学ランから飛び散る汗と気迫、力強い吹奏楽で若さに溢れていました。

立教が得点すると「見よや十字の旗かざす」肩を組んで応援歌の大合唱。

失点しても「気にしなーい」と励まし、７回の攻撃には校歌でエールを送るなど、応援に夢中になって、ボールの行方を見失うこともありました。

試合は、シーソーゲームを制した立教が慶応に勝利！

野球部を応援しに来たはずなのに、いつしか応援部にも魅了されてしまう、それが応援席の魅力ではないでしょうか。熱き血潮が甦るひと時でした。　(M)

編集後記

本号ほど編集長が楽だった号はないだろう。何とか発行にこぎつけたのは、全て、副編集長と編集委員全員の努力の賜物である。原稿を寄せていただいた皆様、アンケートへの協力をいただいた７期生全員に感謝。

古田 裕　大橋三紀夫　加瀬靖博　関口 敬　代 浩行
前列　酒井早苗(副)　石倉 寛(編集長)　佐野英二(副)